

水 振 協 ニ ュ ー ス

平成 21 年度号

編集・発行 (財) 滋賀県水産振興協会 (tel 077-568-3451)

草津市志那町 1393-2

平成 21 年は 7 月、8 月に雨が多かったが、4 月～6 月の小型種苗の生産時期の天候に恵まれ、生産目標を達成することができました。各漁業組合、水産試験場には養成、放流、標識調査にご協力いただき、ありがとうございました。放流尾数は下の表のとおりです。

区分		尾数
ニゴロブナ	2cm 稚魚	1,154 万尾
	22g 稚魚	102 万尾
ホンモロコ	ふ化仔魚 1～2cm 稚魚	1 億 1200 万尾 355 万尾
アユ	流下仔魚	47 億尾
ワタカ	5cm 稚魚	27 万尾

ニゴロブナ

2cm 稚魚は水田放流が 1,033 万尾、栽培漁業センター、山田地先筏の生産が 121 万尾でした。体重 22g の大型稚魚 102 万尾は栽培漁業センター、山田地先筏で 97 万尾を生産し、滋賀県漁連から 5 万尾を購入しました。この他に、滋賀県漁連では大型稚魚 30 万尾を放流しています。



ニゴロブナ卵の水田放流



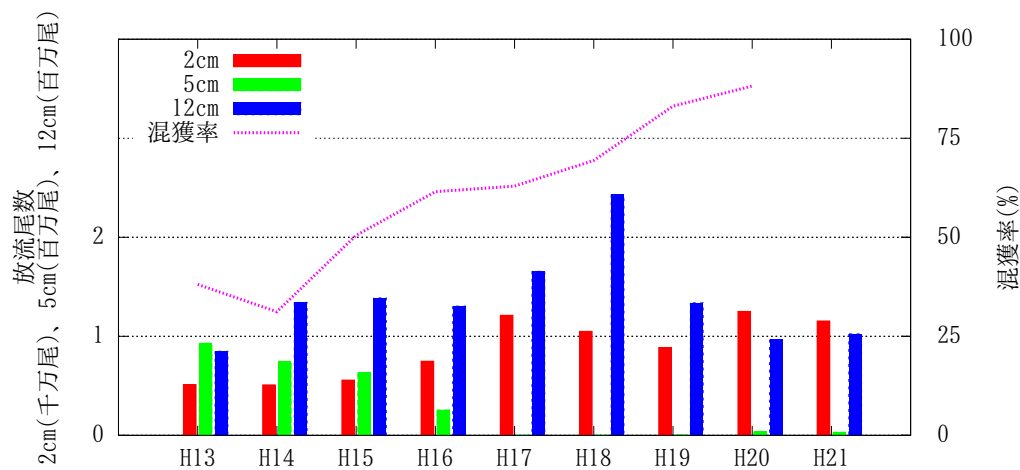
ニゴロブナ的大型稚魚放流

水田育成 主に沿湖漁業組合のご協力により実施し、15 漁協、510 反の水田にふ化仔魚を放流し、2～3cm 稚魚 1,033 万尾が琵琶湖に流下しました。水田からの稚魚の流下率（流下尾数／放養尾数）は 49%でした。

昨年度までのふ化仔魚だけでなく、卵を水田に収容し、そのままふ化させる取り組みも行いました。成績はふ化仔魚の場合と変わらず、効率的な方法であることがわかりました（前ページ写真左の緑色のナイロン製の藻に卵が付いています）。

放流効果 協会では放流の効果を知るために、標識調査を行っています。平成 22 年の冬、5 つの漁業組合で、小糸、沖曳で漁獲されたニゴロブナを調査しています。今年の混獲率は調査中ですが、平成 21 年の混獲率（漁獲魚に占める放流魚の割合）は 88%でした。混獲率は、2 年連続で 8 割を越えており、放流は大きな効果があることがわかっています。一方、天然の生産が少ないことも表しており、天然資源の少ない状況は続いています。

天然資源が増えない理由を調べるため、平成 21 年夏、湖西、海老江の荒目エリで獲られたニゴロブナを調べました。その結果、混獲率は天然魚が約 7 割と多く、放流魚は約 3 割でした。特に、沖合いで放流した大型稚魚が低い値でした。沖合いの小糸、沖曳などと比較して、荒目エリでの混獲率が低いことは、放流魚が天然魚ほど夏に接岸していないこと、つまり、あまり産卵していない可能性もあります。調査を続け、その対策を検討したいと考えています。



ニゴロブナの放流尾数と混獲率

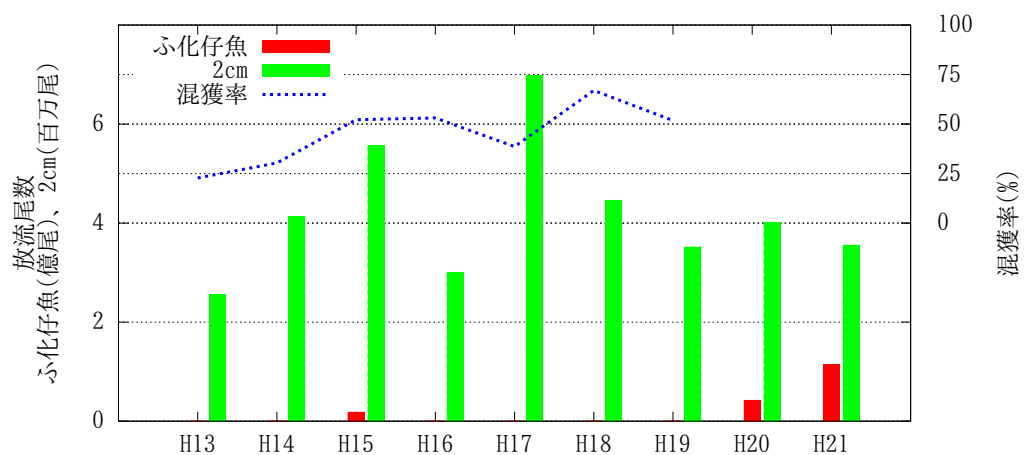
ホンモロコ

平成 20 年からふ化仔魚の放流を始めてます。栽培漁業センター、山田地先筏の親魚から採卵し、近江八幡市佐波江地先、大津市小野地先に卵を輸送、網に入れ、ふ化まで保護し、ふ化仔魚数で 1 億 12 百万尾を放流しました。下の写真の青色の網の中に卵が入っています。また、山田地先筏で 1～2cm 稚魚 355 万尾を生産し、南湖に放流しました。

平成 20 年、ホンモロコ親魚は姉川人工河川で飼育していましたが、水温が低く、産卵期が 6 月以降に遅れるため、栽培漁業センター、山田地先筏に移しました。これにより、平成 21 年は 4 月からふ化仔魚の放流を始めることができました。



ホンモロコ卵の放流



ホンモロコの放流尾数と混獲率

アユ

滋賀県からアユ人工河川管理運用事業の委託を受け、琵琶湖にアユ仔魚を放流しました。人工河川へのアユ親魚放流量は、渇水のための追加の放流を加え、17.2 トンでした。琵琶湖への流下仔魚数は 47 億尾でした。



アユ人工河川への放流



石に産みつけられたアユの卵

ワタカ

滋賀県から環境改善在来魚放流事業の委託を受け、栽培漁業センターでワタカ 5cm 稚魚 27 万尾を生産し、南湖に放流しました。



ワタカの計量



ワタカの放流